

夢の話

ひげフレディー

こんな時間に「おはようございます」ただいま午前二時。昨日はあまりの眠さに午後九時に布団に崩れ込みまして、僕にしては珍しく夢を見まして、先ほど疲労感いっぱい目覚めたのです。と言っても悪夢にうなされたわけではありません。久世光彦が演出した往年のテレビドラマのようなテイストの、そうですね「時間ですよ」とか「寺内貫太郎一家」みたいなね、結構おもしろい夢でした。

舞台はとある畳屋。そこへ僕がフラッと現れます。その畳屋には鈴木京香似の娘さんがおりまして、僕は彼女と一緒に畳屋の仕事を手伝い始めるわけです。それが結構いい雰囲気です、僕も彼女もマンザラでもないかな？お互い「ホの字」なんじゃない？みたいなね、そんなちよつとソフト・フォーカスな展開です。

折しもその畳屋にはお坊さんや親戚の人が集まっておりまして、法事かなんかが行なわれている最中。で、なぜか僕がその席に呼ばれまして

「あんたどこから来んかった」
なんて聞かれて

「わたくし畠山桃内と申しまして、出身は和歌山でございます」
などと、意表突きまくりの事をやたらいい声で滑舌良く言い出すわけです。で、和歌山がいかに素晴らしい所か。について散々しゃべったあげく

「ま、全部ウソなんですけどね。ガッハッハッハ」……と

そんな実に夢らしい夢でございました。

僕には別居中の妻がいる。とても美しい人だ。非凡な才能にも恵まれ、一見華やかで活発な人に見られがちだが、心にトラウマを抱え、実はとても不器用で臆病な人だ。その彼女が仕事の関係でこの街に来ているというので、「じゃあ」という事で会う約束をした。

久しぶりに会う妻は、白いシャツに黒のパンツ姿。ポトフオリオが入っているとと思われる大きな鞆を肩に掛け、かかとのある靴をカツカツ鳴らしながら颯爽と大股で現れた。こんな彼女を見るのは初めてかも知れない。石造りの建物が並ぶオフィス街を歩きながら、互いの近況などを報告。

「実は昨日ギトさんに会ったの」

「どうやら仕事のパートナーを紹介してもらえ事になったらしい。」

「今日もこの後、ギトさんちにご招待されてるんだけど、よかったらキミも一緒にどう？」

（彼女は僕を「キミ」と呼ぶ）

「あ、うん、いいよ」

途中、手土産の菓子などを買い、ギトさんちに向かう。

その家は、鈍く黒光る太い柱が印象的な古く立派な日本家屋だった。天井は高く、二階まで吹き抜けになっている。いわゆる「鰻の寝床」のような間取りで、法事か何かだろうか、親戚らしき人たちがたくさん集まっていた。すべての襖は取り外され、長細い宴会場のような佇まいだ。いつもの調子で出迎えてくれたギトさん。さつそくパートナー候補らしき人が呼ばれ、和やかな雰囲気の中名刺の交換などが始まった。小柄で朗らかな女性だった。それを横目に僕は案内されるまま一番奥の席へ。

するとそこには昔の会社の同僚二人が。昔話から冴えない近況話まで一通り盛り上がったところで、はたと気がついた。隣りの席に座ってるのは僕の親戚のおばちゃんじゃないか。

「あ、どうもご無沙汰しております」

と声をかけると、おばちゃん既にかなりお酒が入っているらしく、無然とした表情で無言のまま中空を睨みつけている。

「では、皆さん揃ったようなので、この辺で乾杯といきましょう」

ホスト役のギトさんが声を上げる。グラスを手に立ち上がる一同。しかし、おばちゃんだけ立ち上がらない。それどころか急に仰向けに寝っ転がり、足をバタバタさせながら僕を指さし

「おまえの人生それでいいのかーっ！」

と怒鳴り始めた。続いて何やら叫んでいたが「カンパイ！」の声にかき消されて聞き取る事はできなかった。

という夢を見た。

「私、ヒゲさんの子を身ごもったみたい。あ、そんな事より、昨夜ヒゲさんがとても淋しそうな目をしていました」
「そんな文面がスカイプのチャットに飛び込んできた。」

おお、子ができたとな？　じゃあ名前を考えなきゃな。男なら民男。女だったらイネ。なんてどうだろう……
っていうか妊娠？?!

いやいやいやいや、そんな無防備なナニをした覚えはないんだけど……
いや、それ以前にそーゆー行為自体まるで身に覚えがない。

つかさ、淋しそうな目も何も、僕が最後にあなたに会ったのは何ヶ月も前じゃないですか！

冷静になってよくよく話を聞けば、あーはいはい「そういう夢を見た」って事だったのね。

しかしアレだね、夢の中の僕が淋しそうな目をしてた。ってだけで心配してただけるとは、ありがたいやらもつ
たいないやら。自分が滅多に夢を見ない体質なだけに、誰かの、とりわけ女性の夢にマンザラでもない役どころで出
演できた事だけで恐悦至極であります。

とりあえず、生まれてくる子の名前は決まった。さあ安心して元気な子を産んでくれたまえ！

ここ数日寝付きが悪く、くわえて眠りも浅く、一時間おきに何度も目覚め、一度目覚めると再眠に手間取り、よって慢性的な睡眠不足でつねに眠い。寝付きの良さと、一度寝たら何が起きてても起きない深い眠りだけがトリエの僕だったのに……

「ごめんごめん まだクルマ直ってないんだよねえ 悪いけどしばらくこのクルマでガマンしてくれる？」

と、修理工場の大将 (Thingp さん) に勧められたのは四〇年近く前のコロナ。車体はモスグリーンで屋根だけ白の二ドアハードトップだった。そんな古いクルマを運転するのは初めてだったのでハイテンションでハンドルを握り走り出す。久しぶりのマニュアル・ミッションに興奮しつつ田んぼの一本道を走っていると突然踏み切りに差し掛かる。一旦停止し再発進しようとアクセルを踏み込むも「アレ？」踏めない。アクセルの辺りに手を伸ばしてまさぐると……何やら物が挟まっている。壊れたサングラスや潰れた空き缶など「オイオイ」ってほど多くのガラクタがザクザク出てきた。

「なーにやってんのよもお！」

助手席のスモールパパさんが突然騒ぎ始め、後部座席からはRENさんの手が伸びてきて、大笑いしながら僕の髪や顔やらをグシヤグシヤ引つかき回し、その横に座っていたとらじろうさんはいつもの穏やかな口調で皆をたしなめた。……ん？ キミらいつの間にクルマに乗ったん？

そんな夢を見た。

若いころ務めていた会社の先輩がフラツとやって来た。たしか歳は二つほど上。僕がその会社を辞めた後、離婚なさって、その後すぐ会社も辞め、今はたしか実家で年老いたご両親と三人暮らしのはず。

「しばらく泊めてもらえないかな？」

突然の事で少々驚いたが

「全然いいですよ 自分の家だと思ってくつろいでください」

という言葉がスルツと出た。サラリーマン時代ずいぶんお世話になったし 音楽の趣味とかが結構かぶってて話しても面白いし、僕は彼を兄貴のように慕っていたし尊敬もしていた。

「お腹空いてませんか？ 何か食べに行きましようか？」
と言うと

「いや、できれば外には出たくない」

との事だったので、あり合わせの材料で野菜炒めを作ると、物凄い勢いで食べ出し、時々喉を詰まらせながらもアツという間に完食。もしかしたら何日か食べてなかったんじゃないかなろうか……。

僕が洗い物をしている間 彼はつけっぱなしになっていたテレビを消し、古い雑誌を引っ張り出して来てパラパラしてみたり、レコード棚を物色したりしていたが、その後も少しだけ昔話をした程度でほとんど会話らしき会話をしなかった。なんとなく「急にやって来た理由」とか「最近どうですか？」的な話題は避けた方がいい気がした。

そして翌朝、僕が2杯の珈琲を入れているシーンでこの夢は終わった。彼の起き抜けの第一声が「あー胃が痛い」だったのが妙に印象的だった。

あ、そうそう。僕はその先輩を「ちんさん」って呼んでたっけ。

深夜まで頑張る力が残っておらず、早朝に仕事をする事にして早寝したのに、延々と浅い眠りを彷徨い、ギトさんが「男優を差し置いて女優とカメラの話をし続けるアダルト・ヴィデオのカメラマン」という役で出演する夢の途中で目が覚めて、鼻の奥と喉に何となく熱っぽさを感じつつ、天井の写真など撮ってみたが、ブログなど書いてる場合ではないので頑張って再度寝る。

あれはカノジョと付き合い始めて間もない二〇代の頃、僕はJR名古屋駅で電車を降り、改札が出る直前、車内に忘れ物をした事に気づいて引き返した……とか、おそらくそんな理由だったと思うが、とにかく他の乗客と別行動を取った。しかし運の悪い事にその電車は終電だった。ウロウロしているうちに構内の照明はどんどん消えていき、改札口への通路も閉じられ、そして駅員の姿もいつの間にか消えていた。

おいおい駅に閉じ込められちゃったんじゃない？

出口を求めて右往左往していると、運よく施錠されていない扉を発見。その扉は細く薄暗い通路に通じていた。見るからに関係者以外立ち入り禁止の通路だ。しかしこうなったら背に腹はかえられない。出口に続いていると信じてその通路を歩くしかない。それにしても、悪い事をしているワケでもないのに、この妙に後ろめたい気分はなんだ？

あつ、若い女性2人組がこっちに向かって歩いてくる。おそらく駅の売店かレストランで働いている従業員だろう。まずい……僕らが部外者である事を悟られないようにしなければ……嫌々な汗を滲ませつつ伏し目がちに歩く僕。しかしそこで思いもなかった展開。すれ違いざま、それまで沈黙を守っていたカノジョがニコやかに

「お疲れさまです」

と声をかけたではないか。すると彼女たちも

「お疲れさまです」

と返してきた。自然だ。完璧だ。キミはタダモノではないな。

結局僕らはその通路を使って駅からの脱出に成功したのだけど。それにしても。あの夜のあの出来事が本当に起こった事なのか……それとも妙にリアルな夢だったのか、今となってはその真偽すら定かではない。が、どっちにしてもその事件がその後の僕の人生に多大な影響を与えた事は、間違いない事実。なのである。

終